
~ 七色かまどの数奇譚 ~

秋葉春木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「七色かまどの数奇譚」

【Nコード】

N3913BA

【作者名】

秋葉春木

【あらすじ】

「超常現象は、いつだって傍にあるんだ」

超能力。幽霊。悪魔。妖怪。

ごく普通に生きていては見逃してしまう超常現象にも、必ず因果が存在する。それを解剖し、解明し、解決する“解決屋”

その見習いである高校生・七色かまどが出会う数々の奇譚。そしてその奇譚以上にヘンテコな少女たち。

七色かまどが“消えていく少女” 参月雪美と巡り合ったことをきっかけに、七色かまどの奇譚は累々と回り始める。

他サイトとの重複投稿です。

プロローグ（前書き）

ラノベ風味学園ファンタジーのほんのりバトル添え、です。

小説初挑戦です。感想などございましたら、水のお代わりを頼むがごとく気軽さでよろしくおねがいます。

年齢制限や残酷な描写はありません。ある程度の倫理も守っておりますので、老若男女、頭の先から足の爪まで安心して読みいただけます。

プロローグ

『消滅娘と放課後』

数日前から、二号館の音楽室に幽霊が出るといううわさが広がっていた。

自縛霊。浮遊霊。怨念。

そういった類いの超常現象はたいてい根も葉もないうわさ話だ。琵琶湖の又シが体長十メートルあるとか、階段の十三段目は異次元への入り口だとか。あとは、よく視線が合うあの子は俺のことを好きなんじゃないか、とかいう妄想と同じだ。

だが、七色かまどは急いでいた。
放課後の階段を、音楽室のある四階に向けて二段飛ばしで駆けあがる。

今回の幽霊騒動をかまどが聞いたのはつい先ほどだった。そういつた話で盛り上げられる友達が何人もいれば違っただろうが、かまどにはそういつた友人はほとんどいない。むしろうわさ話をする友達ならまったくくないと言い換えてもいい。今回ばかりはそのことを悔やむ。致命的に遅れた状況把握はまぎれもなく普段の高校生活の因果だった。反省。

「まあでも、しょーがないかな、これは」
かまどはつぶやいた。半省くらいでいいか。

春の新学期が始まり、まだ一週間。新しいクラスに馴染み切っていないこの状況での幽霊騒動というのはいくらデマが多くても、比較的に事実である可能性が高い。父親曰く、「人のうわさ話にや二種類ある。真実から生まれた好奇心か、好奇心から生まれた虚実か」だそうだ。この新鮮な人間関係を形成する時期に、よもや誰かひと

りの幽霊話を広めるなんてことはクラスメイトたちもしないだろう。となると、目撃者が複数いる可能性が高い。

超常現象において、目撃者がひとりからふたりに増えると正の確率は十倍上がる。ふたりから三人に増えると、二倍は上がる。正の証明ができなくとも、統計的なデータを見る限りでは真実に近づいているといえるだろう。

だからこそ、かまどは急ぎ確認しに行く必要があった。

それに学校中に広まっているであろうほどのうわさになると、嘘から誠が生じることもある。単純計算で八百人の生徒が同じ幽霊の存在を信じたとき、彼らの話す言霊は力を持つ可能性もあるのだ。

超常現象を創り出すのは、いつだって人間なのだ。

「……いや、違うな。たしか父さんがなんか言ってたな……」

かまどは階段を踏みしめ、思い返す。

たしか二年ほど前に、父が超常現象と人間について語ったことがあったような気がする。

なんだっけな。

かまどは考えつつ、階段を登りきると廊下をダッシュする。何人かの生徒とすれ違ったが、かまどは彼らの顔すら確認せずに通り過ぎる。

ダメだ。思い出せない

もともと記憶の掘り返しが苦手なかまどにとって、二年も前の会話など明確に覚えているはずもなかった。ぼんやりと、そのときの風景だけは覚えている。頭のいいやつっていうのはこういうことでも覚えているものなんだろうか。

そんな疑問を浮かべながら、かまどは音楽室と書かれたプレートを確認する。っていうかうちの高校に音楽室があったとは知らなかった。

かまどはすぐさま、扉に手をかけて力を込める。

ガラツ。と乾いた音を立てて、扉はスライドされた。

『 放課後。音楽室のピアノの横に幽霊が立っている 』

かまどの頭の中で、クラスメイトが話したうわさ話が流れた。

幽霊が立っているピアノ。

幽霊が立っているピアノ。

幽霊が、

「……いた」

その少女は儂げな表情で、窓の外を眺めていた。

綺麗に整った容姿に、スタイルの良い四肢。腰まで伸ばした長髪と、眉で切りそろえられた前髪。そしてなにより際立たされるのが、ほとんど半透明に見えるその姿だった。

消えかかっている少女だ。

かまどはそんな言葉を浮かべた。

幽霊？

違う。そうじゃない。

彼女は存在が、消えかかっている。

幽霊なんていう単純なものじゃなかった。

それはいまのかまどの、理解の範疇を越えていた。

しかしそれを放置できるはずもない。かまどはこちらを一瞥すらしない半透明なクラスメイトの少女に向かって声をかけた。当たり前障りのない言葉で。

それが、超能力者・参月雪美みつきゆきみとの初めての会話であった。

「……えっと、今日は冷えるよな……」

吉話（前）

吉話 『消える参』 消滅娘

「なあ陸花^{りか}」

「なあに。かまどさん」

「なんでぼくがクラス委員に選ばれなきゃならないんだ？」

「それはかまどさんがクラス全員から頼りにされているからじゃない？」

「ぜったい厄介の押し付けだろ」

「かまどさんはそう思うの？」

「ああ。思うね」

それはそうだろう。

なぜ自分がクラス委員にされた挙げ句に、放課後にわざわざ教室で居残ってまでプリント整理をやらいといけないんだ。

かまどは仏頂面で、正面に座る白縁の眼鏡をかけた少女 海野陸花を眺めた。あいかわらずやわらかい表情をしている少女だ。母親のようにこっちを見てくる。

陸花はくすりと笑いながら、優しい口調で言った。

「かまどさんがそう思うのは、かまどさん自身が周りをそういう目で見ているからよ。自分の嫌な役職は他人に押し付けたい。そう思っているから、自分の嫌な役職が回って来たときに『押し付けられた』と思うの。他人は自分を映す鏡。……心理学としてはこういう使い方が正しいわね。だからかまどさん。あなたがそう思うのは、自分がそういう人間だからなの」

「……………」

かまどは言葉につまった。まったくもって返す言葉が無い。

陸花は続けて、

「かまどさんは小さい頃から友だちを作らなかつたでしょ。だから分かりにくいのかももしれないけど、かまどさんが思っているほどみんなは酷い人じゃない。むしろ優しい人ばかり。今回かまどさんがクラス委員に選ばれたのだって、むしろかまどさんのことに興味があるからじゃないかな。興味がなかったり嫌いだったりしたら、高校三年生にもなつてクラス委員を名指しすることなんてないんじゃないのかな」

「……そういうもんか？」

「そうだと思うよ。それに、かまどさんならたとえどう思っても与えられた仕事はきちんとこなすでしょう？ だからかまどさん自身がひねていようと、かまどさんが悩むことじゃないわ」

「……ヒネてなんかないけど。たぶん」

「あらそう？ それならわたしがこれ以上手伝う必要は」

「すみませんぼくは居残りを愚痴る程度にヒネています」

「ふふ。わかればよろしい」

くすりと笑つて、陸花はプリントの整理を再開する。

かまどは見透かされたことを言われて、少し気恥ずかしかった。とはいえ慣れたもので、十年以上もこの少女に監視し続けられているように感じているかまどにとっては、そんなことを言われても不快感はなかった。まあ昔から陸花はこの調子なので、中学の時なんかは本気で嫌だつたりもしたけど。

「それよりかまどさん。クラスメイトとは仲良くなれた？」

聞かれて、かまどはちらつと陸花を見た。

眼鏡の下の大きな瞳はプリントに向けられているようだった。

「いや。ぜんぜん。陸花以外で喋るのは相変わらず翔太だけだ」

答えつつ、陸花を見つめる。彼女は薄い化粧の匂いを漂わせていて、妙に艶のある唇をしていた。それに気がついて、かまどはついそこで視線をとどめた。

「もう少し交友関係を広げてみたら？」

「それができたら苦労しないよ」

陸花はふんわりした髪を首元でまとめ、胸の方に流している。そういえば去年くらいから、やたらと発育してきたな。

「そうやってやる前から自分のできることを限定するのも、かまどさんの悪い癖よ」

「でももう三年だし」

そういえば陸花も女の子だったか。今までそういう目で見てこなかったけど、よくよく見てみると色っぽい体してるんだな……とかおやじくさいことを思ってしまう。

「それにかまどさんは彼女を作らないのね。……いないの？ 気になる子」

「気になるやつならいるけど。まあ、恋愛とかじゃないんだけど」
それに女の子って、机を挟んでも良い香りがするんだな。陸花は昔から真面目な図書委員タイプだからそういうことには興味ないと思っただけど、やつぱ香水とかつけてるんだらうか。

「そう。気になるというよりも、興味があるというほうが正しい？」
「そんな感じだな。どんなやつだらうって感じた」

それに考えてみれば、妹以外でまともに会話する女子っていうのも陸花だけだ。……てか妹は女子の分類じゃないしな。

「そうなんだ。ちなみに誰か教えてくれる？」

「ああ。ほら、うちのクラスの美人さん。たしか去年はすげえ人気があった……参月雪美」

ってことはやつぱり、一番近い女子は陸花ってことになるか。

そういえば陸花は好きな人とかいな

「誰だっけ？ その人？」

それは、かまどにとつて予想外すぎる反応だった。慌てて答える。

「え？ いや。ほら、参月雪美だよ。バスケ部の。学校一の有名人」
「……そんな人いたかな？」

陸花は本気でわからないらしく、手を止めて、シャーペンをカチカチと鳴らしていた。いやまあ、知らない可能性がないわけでもない。陸花は評判などで他人を理解する人間ではないし、陸花のよう

な文化部タイプと、体育会系女子で有名な参月では関わりも少ないだろう。共通項あったとしても両者ともテストの点が高いというくらいだし。

だから、かまどは無理に理解してもらうつもりはなかった。

いくら陸花でも、知らないことは知らないのだから。

「いやまあ、知らないならいいんだけどさ」

「……ごめんね。クラスメイトくらいは全員覚えていたつもりなのだけれど」

「ま。そういうこともあるから」

「……そうね」

陸花は歯切れの悪い言葉で、思い出すことをあきらめたらしかった。

「でもかまどさん。なんで急に気になったの？ 本当に恋じゃないの？」

「いや、だからべつにそういうのじゃなくて。なんとなくだよな」となく

かまどはホルドアップの体勢をとり、これ以上深く踏み込まれないようにした。視線を少しだけ動かし、教室の一番後ろ窓際の席を見る。そこは参月雪美の席であり、たしかに彼女の評価は聞いた限りでは凄まじいものだったはずだった。去年度までは。

だからこそ、かまどの気にかかっているのだ。

なぜそんな人気があるはずの彼女が。

クラスが変わってから、自分と同じように常にひとりでそこに座っていたのかを。

それが七色かまどが、彼女 参月雪美について知っている情報だった。知ることはほとんどないといっても差分はないだろう。同級生といえど関わりが一切なく、学校のアイドルともいえる崇拜を受けていたらしい彼女とかまどとでは住む世界が違っていた。かま

どのベクトルと参月雪美のベクトルが人生上のどこかで交わるなんてことは想像したことすらなかったし、美人で聡明な彼女の評判にはむしろ根拠のない嫌悪感すら持っていた。

まあ、ただのひがみみたいなもんだけど

とはいえ、それくらい参月のステータスは飛び抜けていたらしい。定期テストでは必ず五位以内に入る生徒会副会長。それだけでなくバスケ部の部長も務め、部を全国大会に導いた天才だ。性格はどうか知らないけど、男女問わず人気があるという。教室では常に誰かというような人物だったというし、まあかまどとは正反対とも言える位置にいた人物らしかった。

……ただし、去年度までは、だ。

三年になり、かまどは参月と同じクラスになった。うわさで聞いていた超人はどんな人物だろうか。そんな興味があった。しかし、かまどが見た参月は、そんな評判の姿にはいつさい似ても似つかない様子だったのだ。

誰も話しかけない。誰も見向きもしない。

教室の隅でひとり無表情に座っているだけだった。

随分と前評判とは違っただな。

かまどはそんなことを考えた。まるで空気のような存在だと思ったのだ。だからこそ、それが気になっていた。

その参月雪美がいま、かまどを上目づかいで見ている。放課後の音楽室で。

「あなたは、私を誰だと思っているの？」

なんて高飛車な物言いだらう。さすががしごくらしいの態度だった。かまどは苦笑で返す。

「参月さんだろ。ぼくだってそれくらいは知ってるって。クラスメイトだし」

「それは結構。でもなぜ私があなたとの会話のために時間を割かな

ければならないのかしら」

「それはだな」

「この学校中で最も美しく人気のある伶俐で万能な参月雪美が、なぜにこれといった特徴もない万年クラスのモブキャラである存在のあなたと貴重な夕暮れ時のひとときを共有しなければならぬのかしら」

自分褒めすぎだろ。とかまどは口の中でつぶやいた。一応声にも出してつつこんでおく。「ぼくの個性を決めつけなしてくれ」とはいえ外れてないところが胸に痛いけど。

ちなみに、参月雪美は消えかかっていると意識しない限りはふつうに見えた。いつも教室にいる彼女と同じようにぱつとみは変哲なく表情の薄い少女だ。窓に背を預け、夕日が照る教室の中で変質者を見たときのな冷たい視線をかまどに注いでいる。かまどより少し背は低い、肌で感じる威圧感はとてつもなく高い。上目遣いだということだけが救いだった。DMなやつはこれはこれで嬉しいんだらうけど。

「それで、あなた自分は名乗りもしないの？」

美人に睨まれて喜ぶような性格じゃないことを、このときばかりは誇りに思った。

「七色。七色かまど」とりあえず名乗る。まあたしかに礼節は必要だし。

参月は鼻で笑うと「名前なんてどうでもいいのだけれど」とあっさり切り捨てるように言った。

おい、おまえな。

かまどは苦笑した。

「ところでその七色くんとやらが、私にいったいかなる用件を以ってして話しかけてきたのかしら？ 答えようによっては道頓堀に捨てるわよ」

わざわざ大阪かよ。なんだこの女は。もしかしてこの性格のせいで誰も近づかなくなっただんじやないだらうな。

かまどはそう思いながら、どう説明したものかと頭を悩ませていると、

「頭の回転が遅いようねゴミ虫くん」
と参月は腕を組んだ。

「ゴミ虫って……」

まあこれくらい口が悪ければ、それはそれで個性としてアリかもしれない。

いやまあ肯定してるわけではないぞ。断じて被虐的趣味はない。

「ならこちらから質問してあげるわ。あなたはいかなる手段を用いて音楽室にいる私を見つけることができ、なおかつ話しかけるといふ選択をとったのかしら」

かまどはその言い回しに、ふと疑問に思った。

……見つけることができ？

かまどは首をひねる。参月は日中は普段通りに授業を受けているし、なんせ普通に生きていれば誰かから話しかけられることくらいあるはずだ。意識すれば半透明に見えるが、教室ではふつうの姿だった。そもそも半透明に見えるというのも、ここだけのことだろうが。

かまどは疑問に思いつつも、

「いやだって参月さん、なんか変だったし……そりゃそんなクラスメイトがいたら心配にもなるだろ」

でまかせ半分は答える。

かまどの言葉に、参月はほんのわずかに眉をひそめた。

「そうかしら。ふつうは知りもしない級友には、そんな理由では声をかけないはずよ。あなたがお節介なクラス委員だとしたなら、もうとつくに声をかけていたはず。たとえ絶世の美女が夕日を浴びて見惚れてしまうほどの神々しさを放っていたからといってもね。それともいま本当に私に惚れたのかしら？」

「いやそれはねえよ」

だから自分褒めすぎだつての。

ただ、そんな口論をしている場合ではなさそうだった。参月雪美が口の悪い偏屈女だとかどうでもいい。……まあさすがにゴミ虫は嫌だけど。

ともかく。

かまどにはそういつた反応も、性格も、二の次だった。

「参月さん、なんで消えかかっているの？」

かまどは前置きもなく、ストレートに尋ねた。もちろんさつき見たように半透明な状態が？消えかかっている？ということかどうかはわからない。だが、なんとなくそう感じた。そしてなにより問題なのは、それを参月自身が自覚しているのかということだった。

「……………」

参月は無表情のまま、まるでブラックオパールのような瞳でじつとかまどを見つめた。ほとんど表情は動かなかったが、視線が揺れている。わずかな動揺が読み取れた。

なにもいわないところを見ると、自覚はしているようだ。

返答がないようなので続けて聞いてみる。

「体が消えかかっているなんて幽霊じゃあるまいし、聞いたことがないんだけど」

「それは毎日ジャンクフードばかり食べている低俗なあなたとは、私の体のつくりが違うからよ。食事が体をつくるのは基本だと聞くわ」

などと、余裕のあるような冗談を言う。

「それは解釈間違いすぎだろ。ってかぼくも毎日ちゃんと家で家庭料理食ってるし」かまどは肩をすくめて答えた。

「なら私があなたに理解されるような小さい人間ではないということよ。まあ私を理解できる人間なんてこの世界にいるわけがないのだけれども」

「どこの中二病だよ」もしくは哲学者か。

かまどはため息をつく。

いや違う違う。呆れてる場合じゃないんだ。

「ぼくが話したいのはそういうことじゃないんだって」

「ではなにかしら……。ハッ。まさかあなた、私の純潔を奪おうと音楽室プレイを」

「ちがうわい」音楽室プレイってなんだ。

かまどは痛くなりつつある頭を指先で叩きながら、冷静になるように自分に言い聞かせて。

「そうじゃなくてだな。さすがに参月さんが抱えてる」

「参月様」

「はいはい参月様が抱えてらっしゃる問題に、少しでも力になることができるんじゃないかと思って呼びかけました。これでいいですか」

投げやりに、かまどは言葉を締めくくった。まったくもって、こんな人間と相対したのは初めてだ。

当の参月はというと、なにやら思慮にふけっているらしく、目を閉じていた。

……問題はここだ。この状態が、果たして参月の意思によるものかどうか。

かまどはじつと動かない彼女を観察した。

白くきめ細かな肌に、血色の良い小さな唇。頬は少し赤色に染まっているが、チークなどでなさそうだ。なんせ化粧のにおいがしない。撫で肩だがスタイルは良い。胸なんかもわりとあるように見えるし、腰回りは驚くほど細い。本当にバスケットかと疑うほど足も細いが、よく見るとかなり引き締まっているようだ。……あれ？ そっういえばバスケット部っていま部活中じゃなかったっけ？

「視姦しないで頂戴。変態ゴミ虫」

「うおっ」

いきなり高圧的な声を投げられて、少し焦る。

参月は変わらず無表情でこっちを見据えていた。

「いくら私が魅力的とはいえ、学校でそういう目を向けなくて欲しいわね」

「だからちがうって」

「まあどっちでもいいわ」

「いいのか」

「ええ。私が魅力的ということをお否定しなかったから許してあげる」

「そりゃどーも」

かまどは頭をトントンと指先で叩きながらため息交じりに返す。

参月はその様子を少し眺めてから、

「……ひとつ聞いていいかしら」

声色を少し低くして言った。

もちろんかまどが首を横に振るはずもない。

「なんでも聞いてくれ。ぼくのわかる範囲でならなんでも答える」

もとよりそのつもりで来たのだから。かまどは除霊用の札をポケツトの中でくしゃくしゃに潰して答えた。幽霊ではないので、これは不要になった。

参月は、まばたき一つ見逃さないといわんばかりに目力を強くして、

「あなたは、なぜそんなことを言っているのかしら？」

「……？」

かまどは返答に困った。

質問の意図がわからない。

「本当に頭の回転が悪いようね」

参月が小さく息を吐いて、呆れたように窓の外に視線を外した。

かまどはとっさに答える。言い訳をするみたいに。

「いや。でもこのタイミングでそれ聞く？ ぼくはただ、参月さんがなにか特殊な事態にあるようだから力になれるかなと思っただけで」

「それよ」 参月が遮った。

「それなのよ。先ほども言ったと思うけれども、私はあなたのこと

をクラスメイトという以外はこれっぽっちも知り得ていないし、あなたも同様のはず。なのにあなたはなぜ、私のことを避けたりせずにいるのか、ということよ」

「……避けたりせずにつて？」

「どうも、質問の意図がずれている。」

理解している部分はずれている。かまどと、この少女とでは。

かまどにはそれがなんとなくわかった。まあこれは、経験則だ。

こういった異常事態には多く起こり得る？ 認知の溝？ だ。その溝を埋めるには、ひとつひとつ聞いていくしか術がない。

参月は睨むような視線を維持したまま、気だるそうにつぶやいた。「だから。なぜ七色くんは、みんなのように私を避けなかったのかと聞いているのよ」

なるほど。まずはここか。

かまどは理解を正す。少しだけだが、参月の意思が見えた気がした。

参月はクラスメイトたちに避けられているということとを把握している。そしておそらく、それが当然であるという状況下にあるのだ。なるほど。体が消えかかっている、みんなが避ける。それが彼女の現状。

「ぼくはちょっと、こういったことに慣れてるから」と答えておく。「今度はこっちが質問していいか。参月さんはそんな消えそうな体で、なんで学校に来てるんだ？ ふつうそんな状態ならまず医者とか行ったりするだろ？」

まあ、医者はまったくジャンルが違うけど。それは彼女にはまだ知らないことだろうから。

「……慣れている？」と参月さんは訝しげに睨んできた。

喰いつくところはそこか。かまどは即答する。

「まあ家庭の事情で」というか見習いとして働いてるからなのだが。「なら、この体を治す方法も知ってるの？」

参月も即座に噛みついてきた。

なるほど。

これはどうやら事態は深刻らしい。

参月は、治す、と言った。

それはいまの状態が病気やなにか悪いものであると判断しているわけだ。つまり、今の状況は参月雪美にとって害悪なのだ。肉体的にはどうかわからないが、精神的に。

かまどはといえばいいのか迷ったあげく、

「参月さん。消えかかっている状態がどういうものか、まず自分の解釈を説明してくれないか？ ぼくにはまだ現状がよくわからない。なるべく理解を深めるための言葉だった。それに、わりと相手のことも考えたつもりだったけど。」

「……それはつまり、あなたのことを信用しろということかしら？」
疑われているようだ。

こういうときはなんていえばいいのかさっぱりだ。やっぱり社交性を学んでおけばよかったと後悔した。相手の気持ちや心が読めるESP系超能力者が羨ましい。

「信用、できないか？」

「……………」

訝しげに。

慎重に。

参月はかまどを見つめる。

そのとき、かまどはなんとなく思った。

参月雪美はなにかしらの経験に従って、あまり素直に首を縦に振らないのではないか。人間不信とまではいかなくても、目的が不明慮に近づいてきた人物に無警戒に心をさらけ出す人間ではないのだ。そりゃあ誰だって警戒はするだろうし、かまども同じだ。

だがこの参月は、その警戒心が強い。たぶん、並大抵ではなく強い。

そう考えて思い出した。二年前に父親が言っていたこと。人間に降りかかる超常現象とその人間の関係。

参月が消えかかっている理由。その根本がなんとなく、わかった。

だからかまどは、参月に対してそういう態度をやめた。そういう態度っていうのは、あれだ。

知らない人に接するみたいなの作りの物の自分の態度だ。『信用して欲しいのならばまず相手を信用してみなさい』陸花がよく言っていた言葉だ。

だからかまどは、正直に言った。

「例えば道端で迷子のこどもがいる。みんなはそのこどもに気付かないけど、自分は気付いている。……例えば同級生が財布を落として慌てている。自分がそれを事務室に届けていた。……例えば妹が熱を出す。家族は出かけていて、自分はなにもやることがない」

「……。それがどうかしたの？」

「そういう状況なんだよ、ぼくにとっては。ぼくにはなんとかしてやれる可能性がある。だからやる。それだけだ」

「それが本当なのか、信用に足る証拠を」

「証拠はない。いまは信用もする必要はない。だけどそれだけ困っている状況にいるきみが、ぼくに危害を加えるとは思えないから、一つ提案があるんだけど」

かまどはピンと指を一本立てた。かつこつけているわけではない。他人の意識を集中させるための手法だ。これは父親直伝。

唐突に口数が多くなつたかまどに、参月は少し面喰っていた。

「……提案？」

「そう提案。単純なことだよ。ぼくが信用できないなら、信用できなくてももいい状況を作ればいい」

「どうやって？」

参月は電車で不審な紙袋を見つけたときのような目線で見ってくる。かまどは腕を組んで、うなずいた。

「そうだな……ぼくの背中にナイフでも銃でもなんでもいいから、常に突きつけておけばいいんだよ。ぼくは今この瞬間から、きみの

ことを信用することに決めた」

そう言つて、かまどは両手を上げてホールドアップの体勢をつくつた。完全に相手に自分を委ねるといふ意思表示。この体勢は、陸花以外の人間にしたことはなかつただけだ。

そんなかまどの態度に、参月はまた目を閉じて考え出した。

……これでダメならどうにもならない。

ただ、これがあまり賢いやり方とはいえないことくらいわかつていた。いくら超常現象に経験があるとはいえ、かまどは参月の消えかかっているという状況をまったく理解できていないのだ。それに厳密にいえば、慣れているのはかまどではない。

だがこのまま放置しては危険なことにかわりはないだろう。万が一本当に消えてしまつたらどうしようもない。それは、嫌だ。クラスメイトが消えるなんて、さすがに嫌だ。

だからなんとしてでも、信用してもらうしかないんだけど。

かまどがじつと待っていると、参月はゆっくりと目を開けて、ふうと息をついた。

「ま、とりあえずは信じてあげるわ。それで私はどうすればいいのかしら？」

その答えに、かまどは安堵した。

どうやら、ひとつ難関所を越えたようだ。

……ならいま理解している状況を、説明してもらう必要がある。

かまどは首を縦に振って答えた。

「参月さん。きみの思ういまのきみを話してくれ。現状だけでいいから」

「……わかつたわ」

参月はうなずくと、コツコツとこちらに歩み寄つて来た。

いまさら距離を詰めるなんて、そんなに聞かれない話なのか。とかまどがそう思った瞬間。

シュッ

そんな音が聞こえた気がした。擬音語にすればそんな感じ。

ただ気付いた時には、風を裂く音と共に、参月はかまどの喉元に裁縫針を突きつけていた。どこから出したんだ裁縫針なんて。思わず頬がひきつる。

「あ、あの……参月さん？」声もひきつる。

「なにかしら？」

「これは一体どうしたこと、」

「あいにく今はナイフも銃も持っていないのよ。だから針で我慢して頂戴。まあ思い切り刺せば喉でも死に至るから、たいして差はないと思うけれども」

クレイジーだなこの女。そのうちハリウッドにでも呼ばれるんじゃないか。

かまどはひきつった頬をがんばって少しづつ元に戻して、

「そ、そうか……。じゃ、じゃあそのまま話してください」

微妙に敬語になってしまった。

参月はかまどの目をねめつけつつ、深呼吸した。

「現状ね……。私はいま、どうやら消えかかっているみたいなのよ。うんうん。

かまどは視線だけでうなずいて、次の言葉を待つ。

次の言葉を。

次の……。

……。

「……え？ 終わり？」

「ええ。私が理解しているのはこれくらいよ」

参月があっさりと言ったのける。

「い、いや待ってくれ。もうちょっと他にあるだろ。なんでそうなったとか、いろいろ」

「鼻息を荒くしないで変態ゴミ虫」

ツンとした声で、まだ罵倒された。

かまどはうーん、と少し悩む。消えかかっているということだけ。なるほど自分で確認があることはそれだけということなら、

「消えかかっているっていうのは、どういう根拠があったることなんだ？」

「だから、私は避けられるのよ。話しかけても触れても、誰からも反応がない。まるで私の存在を世界が拒絶しているようにね」

参月は目を伏せた。あくまで無表情だが、なんとなく寂寥感がある。

ああ、さっきの儂げな雰囲気はこれだったのか。と思い返す。

しかし参月はすぐに視線だけキツと戻すと。

「それで七色くん。いえ変態ゴミ虫」「言い直さなくても」「私が知る現状はこれだけよ。少しは役に立ったのかしら？ ……ん？役に立つ役に立ったのかしら、が正しい？」

いやそれはどっちでもいいだろうが。

「まあ、なんとなく想像はつくけどな。ようは参月さんは、なんだかよくわからないけど自分の存在が消えかかっていることを自覚している、ってことだな。ちなみにいつから？」

「一週間前からよ。ちなみにといえば、私は他人に自分の思考を『ようは』などと勝手に解釈されるのが嫌いよ」

「……悪かった」

かまどはつぶやいて、考え直してみる。

一週間前。つまり新学期初日か。なるほど納得がいく。クラス替えしてもみんながまったく参月のことを認識していなかったのも理由があったのか。どうりで陸花さえも参月のことを知らないような口ぶりだったわけだ。

「一週間、ね」

誰にも気づいてもらえなかった一週間か。……いや少なくとも、かまどだけはずっと認知していた。

かまどは、目が良いのだ。視力うんぬんではなく、幽霊や超常現象が見える目を持っている。べつに特別な力があるとかいうわけではない。見えるように鍛えられただけだ。それに鍛えなくても見える人も稀にはいる。いわゆる霊感が強いといわれる人だが。

ともかくかまどは、参月のこともずっと見えていたのだが、たぶん他のクラスメイトは見えてなかったのだろう。見えてないどころか、誰も覚えてすらいなかったのだ。どうやら姿が消えるだけではない。記憶からも、消えていたのだろうから。

憂慮するべき事態だ。

「くそ」そんな状況に気付いてやれなかったことは、悔しかった。

「汚い言葉は嫌いじゃないわ。ちなみに糞という漢字の語源は、畑に撒く両手をかたちどったものだという説が一般的よ。昔は排泄物という概念ではなく、肥料という概念で捉えていたことが分かるわね」「……無駄すぎる雑学だな」

かまどは言いつつ、ポケットから携帯電話を取り出した。画面を操作して、登録されている数少ないアドレスからひとつを選ぼうとしたところで。

「なにをしているのかしら？」

声で止められる。

やけに怒気を含んだ言葉だった。

ぐいっと、かまどの喉に針が押し付けられる。っていうか痛い。

たぶん血が出る。

「いや、ちよいと電話を、と」

「なぜ？」

「参月さんのことを、相談しよう」と

「騙したの？」

ブスッ。と、あきらかに皮膚に突き刺さる音がした。血が数滴飛び出て、参月の右頬に血痕がつく。大きな瞳孔が、はっきりと開いていた。

さすがに怖い。迫力ありすぎだ。

かまどは慌てて、

「いや違う違う」

「私は、あなたを信用した、と言っただけじゃありませんか？」「ぐいっと、さらに喉に針が喰い込む。」

つつつと漏れてくる血は針を伝い、参月の指先を赤く染める。

「ま、まあ落ち着いて参月さん」

「それは命乞いかしら？」

「だから違つて。ひとまず、ぼくの言い分を聞いてくれ」

「私を裏切った者の言い分なんて」

「だから参月さん。はやまるなつて。ぼくはただ、きみの分の晩飯も用意してくれるように妹に頼もうとしただけなんだつて」と。

かまどが言い訳のように言つたその言葉に。

「……え？」

参月雪美は、ようやく無表情を少しばかり崩したのだった。それはモナリザの左右の表情の違いほどのものだったけれど、初めてたしかに感情が表れたのだ。

かまどはかなり疲れた気分で、参月の反応にほつと息をついた。

電話（後）

仏教経典スツタニパータでもないけど、ものごとが心によって生み出されるということは、かまどもなんとなく同意できる気がする。たぶんそれと似た構造のことをさっき陸花に言われたし、かまど自身も気をつけていることではある。かまどは『調和』という言葉が昔から好きで、その言葉を人生の指針としていまのところ行動している。心の籠もらない行動はとらないようにしているし、妹がそういう行動をとればちゃんと嗜めている。まあ妹は直情型なのであまり効果はなさそうだったが。

参月雪美を半ば強制的に自宅の食事に誘ったことも、それゆえのことだった。

調和のために友達をつくらなかったかまどに対し、参月がおそらく感じているであろう孤独感は、決して調和のためなんかじゃないだろうからだ。普段から多くの他人とかかわってきた学校のアイドルが？誰からも見えないし覚えられていない？という状態に陥ったとき、少女の心の調和が形を崩すことくらい、想像にたやすい。

まあいわば半分は、そういうかまどのお節介でもあるわけで、頼まれていない行為だ。

でももう半分の理由は、ことのついでだからである。

「話もしたことが無いクラスメイトの家に招待される趣味も節操も無いし、これからだって持つつもりはないわ」

参月は十六世紀の断首台のように鋭く言い放ったが、かまどは否定を否定した。

「ダメだ。ついでにその？消えていく現象？を、父さんに治してもらうかもしれないからな」

つまりはそういうことだ。

それにはさすがに参月も口を閉じるしかないようだった。かまどの父が？解決屋？という超常現象に特化したトラブルを扱う仕事をしている以上、参月に妥協点も拒否選択も浮かばなかったのだろう。それに実はもともと、かまどは父の仕事を手伝っているだけで、専門知識も技術もほとんど知らなかった。いわゆる？解決屋見習い？というやつだ。家に来てくれなければどうしようもないことも事実だった。

だからかまどは安堵の息をついて、参月を連れだつて家に帰った。と言っても、参月の苦言や暴言を頭からつま先まで心頭滅却される勢いで浴び続ける道すがらだったけど。なんとかギリギリすんでのところで心が折れずに帰れた。

「えーっと初めましてっ。あたし、おにいの妹やってますなないろりん七色燐です！ リンって呼んでくださいね！ 好きなものはバームクーヘンと真剣勝負ですっ！」

家の玄関で出迎えたのは、もちろん先述したとおり妹と父だった。妹は小さな体にまったく中性子線を組み込まれていない様子で、核融合のようなエネルギーをいつも満ち溢れさせている。つまり、めちやくちゃ元気つてことだ。目を爛々と輝かせて、家に入ったかまどと参月に、スペシウム光線のような眩い笑顔で挨拶をした。

ほら、出会ってさっそくのハイテンションに、さすがの参月も悪態ひとつがでないようだ。

茫然としている参月を見て、今度は父が、うざったそうな口調で言った。

「おいおい。なんつーモン連れて帰ってきてんだよ。てめえの初めて見つけてきた仕事がこれか？ ったく面倒だぞこいつは」

父は、妹とは逆に嫌味たっぷり視線をかまどたちに投げかけると、振り返ってリビングへ歩いていった。なにが不満なのかは、だいたいわかる。が、一応客人だ。それなりの態度をとってくれてもいいだろうに。

「すまん、参月さん。とりあえず部屋にあがるか」

かまどが声をかけると、参月は自失から覚めたようだった。父はリビングへと消えたがそれでもおすおすとお辞儀して。

「私は七色くんのクラスメイトの参月雪美と申します。本日はお招きいただきありがとうございます」

めつちや常識人な反応だった。

おいおいさつきまでの罵倒はどうした。家に来るまでに人生をやり直そうと何度考えさせられたことだろうか。まあ父はともかく妹にまで罵声を浴びせるようなシバいてやるところだけだな。とはいえ全国大会出場のバスケット部長に喧嘩で勝てるとは思わないけど。まあともかく、かまどは靴を脱ぎ捨てつつ、

「燐。あとで話す時間はとるから玄関口から去ってくれ」

かまどは燐の背中を押しつつ、リビングの扉を閉める。

「とりあえずあがつてくれ。ぼくの部屋は二階。あと、晩飯のあとで父さんに見てもらおうから」

「……ええ」

かまどは参月を連れて階段を上がり、自分の部屋に入った。部屋に入るなり参月がベッドと勉強机しかない部屋を見回して、

「へえ。もつと小汚い部屋に住んでいるのかと思っただわ」

感心したようなせり……。いや、騙されないぞ。今のもふつうに暴言だ。気付けてよかった。

かまどは鞆をベッドに放り投げつつ、座布団をすすめて自分は床に座る。

「で、聞いてもよろしいかしら」

参月は落ち着いた様子だった。まあこれくらいの美人なら彼氏のひとりやふたりはできたことがあるだろうから、男の部屋に来たくらいじゃ緊張なんてしないんだろうけど。逆ならテンパって火星人みたいになる自信はあるぞ。火星人がどんなのか知らんけど。

「なんなりと」かまどはうなずく。

「あなたのお父様……つまり先ほどの方だとは思っけけれども、あの

人が私のこの妙な体を治せるというのは本当なのかしら？」

また訝しげに聞いてくる。それは気になることだろう。父はどこをどう見ても、反抗期が抜けきっていないイカついオッサンだ。だけどもあ、外見はこの際関係が無い。「まあ、父さんは専門家だからな」

「専門家？」と言葉を返してくる。

「ああ。超常現象に関するよろず屋みたいなんをしているんだよ。解決屋って呼ばれてる」

「……？ それはつまり、どういうことなのかしら」

「幽霊、呪い、悪魔、超能力、そういうった科学外の分野で起こるトラブルを解決する、なんでも屋だ。それと捕捉しておく、妹も父さんも目がいいから（、、、）？消えていく？っていう参月さんの状態を見ることができる。だから他の人には見えてないみたいだけど、ぼくの家では消えていないいつもの状態だと思ってくれていいから」

かまどはとりあえず、そこまでを説明しておいた。

これが普通の人なら、まったく信じられない内容だったことくらい身に染みてわかっている。小学生のころは周囲と自分の見えているものが他人と違うことがわからなくて、いろいろと大変だったけど。いまはもう区別がつくようになった。

だからこそ、参月雪美が半透明になっている瞬間に、これはただことではないことを気付いたのだ。おそらく普通の人から見ればあるときはもう いやもつと前から、彼女は完全に消えていたのだ。目を鍛えてきたかまどにとってすら半透明……それが異常でないわけがない。

その参月はしばらく考えていた。どうやら熟考するときには目を閉じる癖があるようだ。しばらく黙って待っていると、

「……そう………信じるわ。餅は餅屋ということかしら」

素直にうなずいた。もちろん完全に信用しているわけではないんだろうが。まあ自分が消えていくという事実を冷静に受け入れてい

た時点で、彼女はかなり順応性の高い人間であることくらいはわかっていた。

「それで七色くん。いえ、ゴミ」

「せめて虫はつけようかぼくだって生き物だぜ」

「あなたの父親が専門家なのは、知識として理解したわ。だけれどもそれでなぜ、わざわざ私を晩ご飯に招待したのかしら。それは私の抱えている問題の解決には関係あるのかしら？」

彼女は威圧的な表情ではなく、単純に疑問に思ったようだった。かまどは首を横に振る。正直にいうことはないが、隠すものでもない。

「いや。まったく関係ない」

「？ ならなぜ？」

「そりゃ、どうせならみんなで飯食ったほうがうまいからな。うち母さんいねえし、女つ気ないからちようどいいんだよ」

「……………そう」

と参月は呆れたように息をついて、顔を伏せた。

……………あれ。いまのところで「わあっ。七色くん素敵っ」となることを若干ほんのわずか宇宙のなかの地球くらいの割合で期待していたのになあ。

とまあかまどがそんなことを考えていると、

「ねーおにい！ そーいや、陸花ちゃんがさっき来たよ」

と言いつつノックも無しにずかずか部屋に入ってきた妹が、盆に載せた湯のみと羊羹を机に置く。

仮にも女の子連れ込んでんだからプライバシーの頭文字くらいは意識して欲しいんだがね。

かまどはそういう意思を以って睨むと、妹はわかってないのかペコちゃんみたいな表情で出ていった。

妹が出て行くと同時に、

「陸花ちゃんとは、海野陸花さんのことかしら？」

参月は少しだけ視線を下げて聞いてきた。なにかしら気になるこ

とでもあるのだろうか。まあクラスメイトだし不思議ではない。

「ああ。そうだけど？」

「そう。海野さんとは付き合っているの？」

「いやはや。なんとまあ久しぶりに聞かれた質問だろうか。

かまどは少し懐かしさを覚えつつ、首を横に振った。

「ないない。ただの昔からの知り合いだ」

「まあそれはどうでもいいのだけれど。それに釣り合うとも思えないわね」

うるせえじゃあ聞くなよ。と思いつつながら。

「てかおまえ、陸花のこと知ってたんだな」

「……おまえ？」

「ゴメンナサイ参月サン」

「よろしい。私でなくとも、海野陸花さんは有名人だから誰でも知っているわよ。誰でも、というのはもちろんおおよそ、という意味合いだけでも」

ほんの少しも感情を出さずに言う参月。

「へえ。意外だな。でもなんでだ？ あいつべつに、おまえみたいに目立たないだろ」

「……おまえ？」

「ゴメンナサイ参月サン」

「次言ったら絞首刑と同時に銃殺」

残虐すぎるだろ。と心の中でつつこんでおく。

参月はお茶にゆっくりと口をつけて、

「なかなかいい茶葉を使っているようね」「……そうなのか。ほ

くは知らないけど」「ええ。上品な味だね。良い渋みが出ている。

淹れ方も上手ね」

もしかして、こいつどこかのお嬢様なんだろうか？ まあ妹が褒められたことは嫌ではない。シスコンじゃないからそれほど嬉しくもないけどな。

「それはそうと七色くん。いえ、社会のアラ」「それはもしかゴ

ミと表現するにも及ばないという意味か」「海野陸花さんは、あなたから見てどのような存在だと思つのかしら」

あ、話が戻つてる。

「どういうつて、なにについてだ？」

「……主に、彼女の頭脳に対して」

そう言う参月の表情は、わずかばかり焦っているような色を見せた。

かまどは気付かないふりをして答える。

「ああ。あいつは昔っから知識と年齢が噛み合っていないっていう感じだからな……なんていうか、浮世離れしてるっていうか、なんでも見通せるっていうか……まあゲームとかの話題はまったく無理だから、全知全能には程遠いけどな」

はははっと笑つて、かまどはなんとなく天井を見上げた。

まあ、かまどのごときは骨の髄まで理解されていても違和感感じないけど。

「そう」

「……にしても、参月さんは、なんで陸花のこと気にするんだ？」

かまども茶をすすりつつ、聞いてみる。

すると参月は、声を四オクターブくらい低くして。

「なぜ、それをあなたに言わなければならぬのかしら？」

……そこが怒りどころなのか。予想外だ。

かまどは無言で首を横に振った。気軽な話題のつもりだったんだけど、どうにも周囲一帯地雷原のような感覚を植え付けられた。

「勘違いしないように言っておくけれども七色くん。いえ、チリ」

「せめて見えるもので」「なら、カス」「もうそれでいいです……」

「勘違いしないように言っておくけれども、私はあなたと友だちになつたつもりはないわよ。あくまで今は、私の問題を解決してくれる可能性があるから、あなたの部屋にまで上がり込んで」

と、参月雪美はそこで動きを止めた。言葉を止めたのではない。

呼吸も止まっていた。

ん？

かまどは突然固まった参月を見て首をかしげる。なにか思い出したのか気になることでもあるのか……。

「なあ参月さん、なんか」

「どうしてかしら？」

刺すような鋭い口調が飛んできた。参月はかまどを強く睨んでいた。無表情で相変わらず目だけの感情表現だが。

にしても、かまどには一切行動の理由がわからなかった。

「ど、どうしてって、なにが？」

「どうして私を部屋に連れ込んだのかしら？」

睨みつつ、ほんのわずかに視線が泳いでいた。

もしかして、恥ずかしいのだろうか。

「なんでって……そりゃあ、参月さんが異常事態に巻き込まれてるみたいだから」こういう返答でよかったのだろうか。それともどうして部屋にまで上げた、という意味だったのか？

かまどはいきなり警戒しだした参月の様子に、少し後ずさる。また裁縫針が飛んでくる可能性も否めない。

参月は口元に手を当てて、

「……油断したわ。やはり男はすべからくオオカミだという通説は間違ってたよな。音楽室ブレイは罠で本命は自室だということに気付かなかったわ。しかし私はあきらめないわよ。なんとしても純潔だけは守って守ってナイアガラの間隙に追いつめられても守りきって」

「あ……はいはい」

かまどはがっくりと肩をついて、生返事をおいた。

とりあえず、夕食までの時間つぶしはとどこおりなく進んでくれそうだった。それとふたつだけ、わかったことがある。

どうやらこの参月雪美という少女は、少しだけ緊張が解けたようだということ。

そしてもうひとつは。
……こいつ、案外おつちよこちよいだ。

ガチャ。

『はいもしもし。海野です』

「あ、七色です。陸花いますか？」

『かまどさん？』

「あ、陸花か。さつき燐から聞いたけど、家に来たんだって？」

『うん。この前言っていた映画のDVDを貸してもらおうと思って』

「悪いな。明日学校に持っていくよ」

『ありがとう。それとかまどさん、聞いて良いかな？』

「なんだ？」

『かまどさんは、お父さんの仕事のお手伝いをしているでしょう？』

「ああ。バイトみたいなもんだけど」

『それなら……除霊は、できる？』

「……ものによるけど。なんで？」

『弟のクラスメイトなんだけど、ときどき授業中に呻き苦しんだりするらしいの。病気かもってみんな心配してるんだけど、どうにも病気じゃないみたい。弟は詳しい話は聞けないらしいんだけど、うわさでは幽霊とか悪魔にとり憑かれてるって言われているのよ。さすがにそつちの分野になると、わたしが頼れるのはかまどさんしかないし』

「そうか……まあ、ちょっと父さんに相談してみるよ。陸花の弟ってたしか、同じ学校だったよな？」

『うん。一年一組』

「入学したてか。その女の子の名前はわかるか？」

『いいえ。弟が帰ってきたら聞いておくわ』

「ああ頼むよ」

『……ふふ。こつちが頼んでるのよ。かまどさん』

「ん？ そうだっけ」

『そうよ。かまどさんはすぐにそうやって自分を下手に位置付ける癖があるね。それは日本人として美德かもしれないけど、わたしはあまり好きじゃないな』

「おまえは、そうやってすぐに分析するよな。しかも的確に」

『すぐにではないわ。かまどさんとは、長い付き合いだもの』

「……ってことはあれか？ ぼくのことなんか分析済みだとも」

『さあそれはどうでしょう』

「おまえって怖いな」

『怖いのか？』

「怖いね」

『褒め言葉として受け取ってもいい？』

「まあそれでも……あ、そういえばさ、今日話したこと覚えてるか？」

『今日話したこと？ それはいつのこと？』

「放課後。教室でプリント整理しながら」

『うん、もちろん。一言一句覚えてるわ』

「それが真実なのが恐ろしいな……。まあそれはそうと、その放課後にぼくが名前を出した人物なんだけど」

『かまどくんが名前を出したのはたしか、翔太さんと、あとよくわからないけど、参月雪美という人物だったわね？』

「ああ。その参月が言ってたんだけど、陸花ってわりと有名なのか？」

『……その人と、話したの？』

「ん？ ああ。あれだ。ちよいとこつちの分野絡みだから、いま家にいる」

『……へえ』

「それで、おまえって学校でも有名なんだって？ 知ってたか？」

『……………』

「あれ？ もしもし？ 聞こえてるか？」

『…………。 かまどさん。有名、という基準はなに？』

「あ…………わりと名前が知り渡っているかっていうこと。ぼくはあれだ。有名じゃないだろ」

『そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないわね』

「陸花はわりとみんなに知られてるのか？」

『そうかもしれないし、そうじゃないかもしれないわね』

「なんか煮え切らない答えだな。陸花らしくないぞ」

『…………はあ。かまどさんはね、誤解しているわ』

「なにを？」

『わたしは、他人の主観を自分の主観に置き換えることはしない主義なのよ。放課後にも言ったけれど、かまどさんがクラス委員を与えられたことに関して、わたしは他人の心理を断定するようなことはしないの。他人は自分を映す鏡であるのは、他人を量る種類の人間。つまり自己の価値基準をしっかりと持っている人間なの。わたしはまだそこまで自分を見つけれられていないから、他人のことを評価することはしないわ。推測はしても。だからわたし自身が有名なかどうかは、今のわたしには知り得ない』

「…………それは、そうかもしれないな」

『そうなのよ。かまどさんはすでに自分を持っていて、だから困っている他人には差分なく優しくできるでしょう？ けどわたしには基準がないから、他人との接し方に絶対値がない。だから優しくできない。わたしが自分から友だちをつくれな理由はこれなの』

「そうか？ でも陸花は優しいだろ。実際には友だちも多いし」

『かまどさんは誰にでも優しくできる、と言い換えても良いわ。わたしはその時々で決めた相手にしか優しくしないことにしているから。…………かまどさんみたいに、そうやって他人の困ったことを解決できる人間じゃないの』

「陸花。それこそおまえ、自分で自分の限界を決めてるってもんじやないか」

『違うわ。限界じゃない。これは程度の問題じゃないから』

「……そういうものなのか？」

『そういうものよ』

「……まあ、おまえが言うんならそうなんだろうな」

『ふふ。かまどさんは、わたしを随分と買っているみたいね』

「ああ。いつだっておまえは正しいからな」

『それは危険な思想よ？』

「それでも、ぼくは陸花に助けられてきたんだ。いまさら陸花の言葉を疑ったりしない」

『そう。でもそれも、今だけの価値観かもしれないのよ』

「それはそれだ。変わるときは、大人しく変わるさ」

『はやく変わることを祈っているわ。……。それじゃあ、そろそろ切るわ。そっちも忙しいんでしょ？』

「まあ、実際に問題解決するのは父さんだと思っけどな」

『どちらにせよ、参月雪美さんの力になってあげるつもりなんでしょ？』

「ああ」

『ならがんばってね』

「ああ。ありがとう」

『うん。それじゃあ』

「ああ」

ガチャ。

晩飯はハンバーグだった。

とりわけ、大した会話はしていない。参月に釘をさしておいたが、家族の食事に仕事の話は持ち込まないのが我が家のルールだ。つまり参月雪美が抱える？消えていく？という問題について、いっさい

誰も触れなかった。まあ妹はよく理解していないふしがあったけど。それにしても、かまどの前では罵詈雑言の毒舌少女も、妹や父の前では借りてきた猫だった。

「参月さん！ おにいとは付き合ってるんですか？」

「おいこら悪ノリすんな」

「おにいには黙ってて！」

燐は自分の作ったハンバーグをひとくちめから参月に褒められて有頂天だった。いつも元気が取り柄な妹は、さらに活力を倍にして参月に質問の嵐だった。ちょっとした低気圧なら逃げていきそうな勢いだ。

参月もものすごく自然な無表情（、、、）で、それに答え
ている。

「いいえ。ご期待に添えなくて申し訳ありませんけど、かまどくんとは友人として付き合いがあるだけです」

……嘘八百もいいとこだ。友人としての付き合いも皆無のくせに。
かまどは苦笑した。

「なんださんねーん。あたし参月さんみたいな美人なおねーちゃん
が欲しかった」

やめてくれ燐。このおねーちゃん、ほんとうは怖いんだぞ。

すると、横から父が横やりを入れてくる。

「すまん燐。父さんが男を生んだせいで」

「ってつまりぼくのせいだよ」

かまどは怒り半分につっこむ。もはやX染色体が優勢なのは遺伝
子としてだけではないようだ。

「ちがうよおにい。おにいのせいじゃないよ」と妹。

おお、意外と優しいじゃないか。かまどは感動しかけた。

「だっておにいも女でも、美人じゃないから意味ないよ」

まあ期待はしてなかったけどな。

そうこうしているうちに、食事の時間を過ぎたわけだ。食後のデ
ザートに妹特製の杏仁豆腐を食べて、家族の団欒は終了。いまはリ

ビングのソファで休んでいるところだった。その間に妹は食器を片づけて、父は地下室　　仕事場で準備をしていた。

「……良い家族ね」

横に座る参月はぽつりと、眼を伏せて言った。

「そうか。いつもは喧嘩ばかりだぞ」

「それでも、家族で一緒に食事をとるということは、幸せなことだと思っわ」

また、儂げな雰囲気だった。

そういえば、参月の家族はどういうものなのだろうか。かまどは気になったが、そこに触れるような無神経でもないの、もちろん黙っておいた。調和は大事だ。

家庭の事情はそれぞれだしな。

しばらく無言になる。

今日知り合った女子と二人で家にいるなんていうケタ外れに非常識な日常だから、むしろいままで自然に会話　　あれを自然といていいのはわからないが　　していただけ奇跡のようなものだと思うけど。

だからこそ、改めて考えてみるとこれは、ちょっと、気まずい。

「あー……参月」

「?さん?はどうしたのかしら七色くん。いえ、変態」「次は変態オンリーですか参月さん」「それで、なにか用かしら?」

「……。あのさ、一つ聞いておきたいんだけど、いいか?」

参月は睨みはしなかったものの、温度を感じさせない視線でかまどを見た。

「許すわ」

「ありがと。……その、バスケ部なんだよな?」

「意外な質問ね。てつきりスリーサイズでも聞くのかと思ったわ変態らしく」

「なるほどそう繋げるわけか　　ってそうじゃなくて。バスケ部のキャプテンなんだよな?　　やっぱり全国大会に出るくらいっていう

からは、参月さんすげえ運動神経いいんだよな」

「まあ、それなりには自信があるわ。あなたを殴り殺せるくらいには」

「……例えば怖いぞ……。それでさ、ぼくみたいな部活も入ってないし成績もよくない人間と会話してて、面白いのかなーと思って」
かまどは手持無沙汰ついでに疑問だったことを話した。コンプレックス　そういうものかもしれないが、かまどにとって体育会系の人間は、文化部系の自分とは根本が違うような気がしている。いつも見下されているような、笑われているようなこともあるかもしれない。そういった被害妄想のようなことを、かまどは中学の頃からなんとなく思っていたのだ。

参月は、そんな不安げに聞くかまどの表情を見て、

「あ」

と、小さく声をあげた。

かまどには、その「あ」の意味はまったくわからなかったが。

参月はこほんと咳払いして、

「……あなたは私を馬鹿にしているのかしら？」

「馬鹿に？　滅相もない」

「ならあなたは、私がなんの特徴もない変態ゴミ虫粗塵粕屑野郎と会話することに、なんの面白みを見いだせない女だと思っているのかしら？」

「……ってことは、」

「言っておくけれども、私はあなたのような変態ゴミ虫粗塵粕屑反吐野郎でも……時間が経てば友人になれるくらいの器量はあるわ」

友人に、なる。って……。

かまどは少し感動しつつ

「って屑と反吐が増えとる」

一応ツッコんでおいた。

「そうねでもあなたよりも妹さんのほうが友達になたいわ」

「おいまずぼくから攻略しろ」

「ぬるゲーね。クソゲーともいうわ」

「ぼくにとつてはきみはムリゲーだよ」ってかそんな単語知ってるのかよ。

多少なりとも、参月の性格が分かって来た気がする。

そう思っていると、父がリビングに入って来た。時計をみると、夜の七時半だった。

「準備できたぜ。エロ息子」

「……一応、クラスメートの前なんだけど」

父はそれだけ告げて、また地下室へと戻っていった。

準備　かまどにはそれがどういうものかはわからなかったが、それができたということは心づもりはしておかなければならぬだろう。かまどにとつても、今回はまた特別だった。

初めて、自分で見つけてきたのだ

いつもは父に頼まれて手伝うだけの自分が、初めて自分から関わった超常現象。その正体はなんとなくしか理解できないが……。

……役に立ちたいと思っていることは、たぶん悪いことではないはずだ。

かまどはソファから立ち上がり、参月を見つめる。

「さて。じゃあ行くか。参月」

「……ええ」

緊張しているのか、呼び捨てにも気づかなかったみたいだ。

それはそうだろう。

存在が消えるなんていう並はずれた超常現象。

それが自分の体に起こっていることを受け入れているだけで、本当は精一杯なのだろうから。

かまどは自尊心の高い彼女に向かって、少しだけ微笑んだ。

「よし。じゃあぼくについてきてくれ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3913ba/>

～七色かまどの数奇譚～

2012年1月10日03時58分発行